

BBSを使った海外の大学生との異文化交流による協調学習

International Collaborative BBS Project for Inter-Cultural Communication

笠見直子

桜美林大学文学部

Abstract: The principle aim of this research was to investigate to what extent and how BBS (Bulletin Board System)-based project was effective in a class of Internet English at a Japanese university in terms of inter-cultural communication and English language learning. The BBS project was carried out by the 386 students of 14 universities in Japan, Indonesia, Taiwan, UAE, Burkina Faso, Mexico, Brazil, Namibia, and Korea in 2005. In order to evaluate the effectiveness of BBS project, the research data was compared and contrasted with the data of previously existing Home Page (HP) project the aim of which was for students to publish their own information on the Internet. The effectiveness of the BBS project was described based on the data from both qualitative and quantitative analyses including textual analysis, tests, and questionnaires. From the result, it was shown that the BBS project was more effective than HP project. A major change brought about by the BBS project was the dynamism and interaction. Students did play an active role and were motivated to engage in real communication.

Keywords: BBS, inter-cultural communication, Internet, CMC, English learning, e-Learning,

1. はじめに

海外の学生とのコンピュータ・ネットワークを介したコミュニケーション (CMC) による異文化交流の実践事例は、日本とアメリカの大学間の電子掲示板 (BBS) やホームページ (HP) を用いた日米意見交換^[1]等があるが、この分野の事例や学習効果の研究はまだ少ない。そこで、学生が英語に対する苦手意識を克服し、異文化コミュニケーションを楽しみながら学ぶ実践教育をめざし、筆者が2004年度4月から2年間担当したCMCを利用した授業で、試行錯誤しながら得られた効果を報告したい。

2004年度春学期の授業では、学生が英語でホームページ (HP) を作り、異文化の人が理解できるように自分の考えや日本文化を適確に表現し、発信できるようになることを目標としたプロジェクトを行った。しかし、HPという一方向の情報発信であったため、

以下の3点の問題があった。

- ① 学生は異文化の人の関心を惹くようなページを作ることよりも、文法上正確な英語を書くことにこだわってしまった。
- ② 学生は双方向コミュニケーションを体験しないため、伝えたいことを英語で表現できるという自信を持てなかった。
- ③ 相手からの反応がないため、学生の興味ややる気を維持するのが難しかった。

2005年度秋学期の授業では、上記の問題を克服し、主体的な学びと英語による異文化コミュニケーション能力向上をめざし、BBSを使った海外の学生との交流プロジェクトに参加した。本研究の目的は、海外の学生とのBBSを使った協調学習による異文化コミュニケーション能力・英語力向上の効果と、プロジェクト参加に対する学生の満足度を分析することである。

Naoko Kasami
Obirin University
E-mail: kasami@obirin.ac.jp

2. 授業の枠組み

(1) 授業の目的と活動

研究対象とした授業は（BBSによる交流を授業に取り入れた）2005年度秋学期に桜美林大学短期大学部英語英文科の2年生の専門科目「インターネット英語」である（表1）。

表1 研究対象の授業

授業名	インターネット英語 (英語専門科目・半期・2単位)
大 学	桜美林大学 短期大学部 英語英文科 2年生
期 間	2005年度秋学期 (2005年9月28日～2006年1月18日)
学生数	19名
比較対照	2004年度春学期 (HPプロジェクト実施) 20名
授業目標 目 的	インターネットを使って他の人の考えを知り、異文化の最新情報をキャッチしながら、それに対して自分の意見や自分たちの文化などを伝えられるようになることをめざす。世界の人々と交流するための国際語 (international language) としての英語をインターネットを使って、楽しみながら学び実践するという考えに基づいて、学生が主体的に世界にメッセージを発信できるように学習することをめざす (シラバスより抜粋)。
授業形態	90分×14週パソコン教室で実施
授業内容 (基礎) ー共通ー	1)英語の学習や世界各地の情報収集に役立つ国内外のサイトの利用法を学び、2)様々な状況における適切な英語表現をサイトで学習して、3)文化背景を考慮の上、相手の反応を予測することの重要性を認識し、4)パラグラフライティングについて学ぶ。
授業内容 (応用)	授業内容(基礎)と並行して応用的実践活動を行う。 実践活動は学期により異なる。 ・BBSによる他大学との交流(2005年度秋学期) ・英語でHPを作成・情報発信(2004年度春学期)
評 価	BBS投稿を含む課題点(40点)、小テスト(30点)、出席点(30点)の総合評価

授業で学期共通の基礎内容を学んだ後、応用として実践活動を行う。実践活動は学期により異なる。研究対象である2005年度秋学期は、BBSを使って国内外の学生との異文化交流ができるようになることを目標とした交流を実践活動とした。電子メールではなくBBSをメディアとして選択したのは、情報の一元管理やパラグラフライティング指導に適していると判断したためである。

(2) BBSプロジェクトProject Ibunkaの概要

2005年度秋学期は、明海大学の渡辺雅仁先生が運営している「Project Ibunka」という異文化交流を目的としたBBSによる海外の大学との交流プロジェクトに参加した、本BBSプ

ロジェクトには、9カ国14大学から386名の学生が参加し、各教員が自分の大学の学生の学習の責任を担った（表2）。

表2 Project Ibunkaの概要

参加国	インドネシア(3)、日本(2)、台湾(2)、UAE(2)、ブルキナ・ファソ、メキシコ、ブラジル、ナミビア、韓国 (括弧内は大学数)
期 間	2005年10月18日～2006年1月17日 (3ヶ月間)
目的	異文化交流
各大学の 授業	英語ライティング、異文化、コミュニケーション、英語プレゼンテーション等

Project Ibunkaの共通課題として三つのトピック (School Life, Cultures, World Peace) についての英文投稿を行った。また、他の学生への返事を投稿することもできた（表3）。

表3 Project Ibunkaの英文投稿課題

1	School Life	期限：11月10日 自己紹介をする（ワード数：150程度）
2	Cultures	期限：12月20日 自分と相手の文化を知る（ワード数：200程度）
3	World Peace	期限：1月10日 社会問題について語り合う（ワード数：250程度）

(3) BBSプロジェクト参加授業の進め方

毎授業の前半に、教員が表1の授業内容（基礎）を資料や学生の英文を使って説明した。授業後半に、教員は各学生約5分間の個別指導で、レベルに合わせたアドバイスとフィードバックを与え、各学生の努力の成果を褒め、表3の期限内に投稿ができるように励ました。学生は他の学生の投稿メッセージやネット検索をしながら、英文メッセージを各自作成し投稿した。海外の学生のメッセージで異文化について学び、他の日本の学生のメッセージは日本文化紹介の際、参考にさせた。BBSにログインをするとトピック、サブトピックごとに投稿メッセージのタイトルが表示される（図1）。

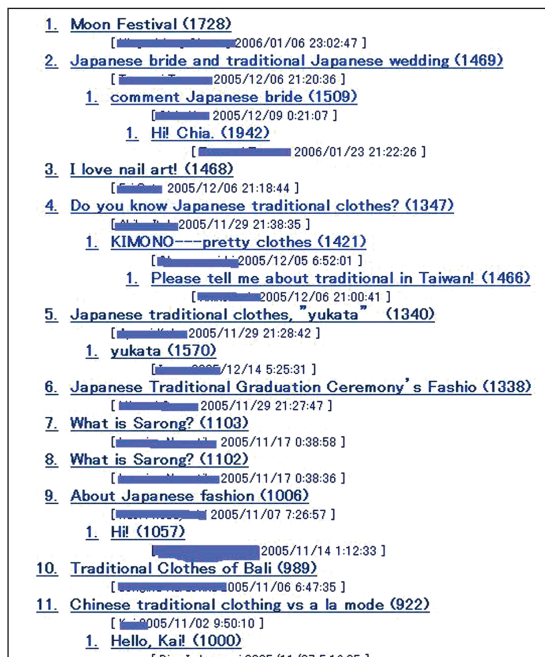


図1 BBS画面のメッセージタイトル

たとえば“Japanese bride and traditional Japanese wedding”というタイトルで桜美林大学の学生Aが花嫁衣裳を紹介している。

“Now, I'm going to tell you bride's costume of traditional wedding. She wears a pure white kimono called “Shiromuku” in Japanese. “Siro” means white and “muku” means purity. (中略) It is mother's hand-me-down.” (ワード数：167) (学生A)

これに対し、海外から「日本の花嫁がどうして白い着物をまとうのかやっとわかりました」との返事があった。学生Aは「あなたの国ではどうですか？」と質問を返した。このような生き生きとしたやりとりは、学生の興味を英語の正確さよりもコミュニケーションそのものに向けるという筆者の目的に沿ったものであった。

授業時間外には、教員は添削とメールによる質問回答をし、学生は英文を完成させた。BBSは授業時間外にもログイン可能であり、自発的な時間外学習を促進した。

3. BBSプロジェクトの効果

本研究で分析対象データとしたのは、

- (1) プレ・ポストアンケートの結果
- (2) プレ・ポストテストの結果

(3) BBSの投稿メッセージ

である。(1)のアンケート結果を2004年度春学期のHPプロジェクト(学生数20名)の結果と比較した。分析結果を次に示す。

(1) プレ・ポストアンケートの結果

① 学習効果のアンケート

2004年度春学期(HP作成)、2005年度秋学期(BBS参加)の両クラスで初回と最終の授業に同じ質問文(あなたの英語、異文化に対する態度と知識について自分の考えと最も近いものを一つ選択して下さい)で回答を得た。「全くそう思わない」を1点、「とてもそう思う」を4点とした4点法で平均を比較した。プレ・ポスト両アンケートに回答した学生を分析対象とした(HP 10名・BBS 15名)。質問項目とBBS・HPプロジェクト前後の伸び幅を以下および図2に示す。

- ・相手がわかるように英語を書く努力をする
- ・日本の教育、習慣、宗教を海外のそれと比較することができる
- ・自分が言いたいことを英語で容易に説明できる
- ・世界情勢を意識して日本史について話すことができる
- ・ボキャブラリは豊富である

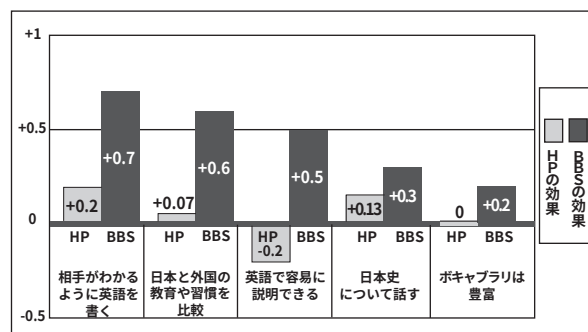


図2 BBS参加・HP作成前後の伸び幅

「相手がわかるように英語を書く」については、BBSのプロジェクト前後を比べて、0.7ポイント伸びた。「自分が言いたいことを英語で容易に説明できる」については、BBSとHPプロジェクトの効果の伸び幅に有意な差が見られた($t=2.90$, $df=22$, $p<0.01$)。

② プロジェクト満足度のアンケート

BBSとHPプロジェクト実践後の満足度を比較したのが図3である。

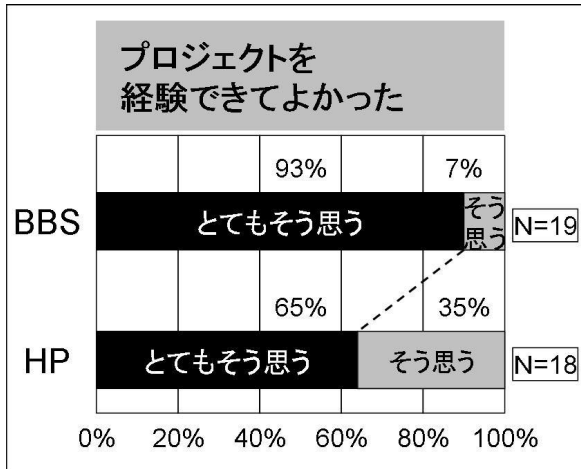


図3 BBSとHPプロジェクトの満足度

2004年度の「HP作成プロジェクトを経験できてよかった」に対し「とてもそう思う」が65%，2005年度の「BBSプロジェクトを経験できてよかった」に対し「とてもそう思う」が93%で（「そう思わない」，「全くそう思わない」の回答は無し），BBSプロジェクトの学生満足度の高さが伺える。

③ 自由記述欄

自由記述欄の類似のコメントを集約した（重複回答あり）。学生が自分の英語に対する自信を持ち，異文化に関心を寄せることの大切さを認識していることがわかる。

- ・自分の英語でも言いたいことは何とか伝えられるという自信がついた（14名）
- ・海外の学生との交流は良い経験だ（12名）
- ・正確な英語より相手の文化背景の考慮，異文化への関心，アイデアが大事である（11名）
- ・返事や相手の存在がうれしかった（7名）
- ・異文化について学べて良かった（4名）
- ・ハードだったがためになった（4名）
- ・先生からのフィードバックが良かった（4名）
- ・もっと英語力を身につけたい（3名）

(2) プレ・ポストテストの結果

BBSプロジェクトの前後に実施したテスト結果を比較した。テストは3分間の自己紹介

の英作文である。学習効果をT-unitを指標として計測した。T-unitとは「1つの主節を含み，その主節に付加される従属節（Hunt, 1970, cited in 平野, 1990）と定義され，ESL/EFLの作文能力を測る信頼性の高い尺度とされている。統語的複雑度を示す(a) T-unitの平均の長さ，(b) 誤りのないerror-free T-unit (EFT) の平均の長さ，正確度を示す(c) T-unit内のEFTの占める割合を指標としている^[2]。

T-unitの平均の長さ（T-unit 1個あたりの平均語数）はプレテストでは4.9であったが，ポストテストでは5.7に増え（有意差なし），EFTの平均の長さは2.5から5.6に増え（ $t=3.69$, $df=13$, $p<0.01$ ），全T-unit内のEFTの占める割合は63.1%から87.9%に増えた（ $t=2.5$, $df=13$, $p<0.05$ ）。T-unitによる分析の結果，学生の英文の量，複雑さ，正確さの面で効果があったと言える（表4）。

表4 T-unitによる数値変化（平均）

ワード数	T-unitの平均の長さ	EFTの平均の長さ
14→29	4.9→5.7	2.5→5.6
T-unitの数	全T-unit内のEFTの占める割合 (%)	
2.7→5.1	63.1→87.9	

さらに，質的にHughes (1989) による英語評価法に基づき，Grammar, Vocabulary, Mechanics, Fluency, Formの面で各英文をnative speakerの協力を得て，3点法で採点した^[3]。表5の数値は評価の平均を示す。FluencyやFormで特に向上した。内容は，プレテストでは，名前，出身地，年齢などデータ中心で，全員がほぼ同じ内容であったが，ポストテストでは，読み手を意識した英文が多く見られた。自分が得意なこと，将来の夢などを自由に書くようになった。

表5 項目別質的評価（評価平均）

Grammar	Vocabulary	Mechanics	Fluency	Form
2.1→2.7	1.8→2.5	1.8→2.6	1.0→2.6	1.0→2.6

各学生の両テストの英文内容を表6に示す（読み手を意識した文に*を付けた）。

表6 プレ・ポストテストの英文内容

学生	プレテスト	ポストテスト
A	名前 出身地 年齢	日本の映画*
B	名前 出身地 住所 趣味	オーストラリア滞在経験*
C	名前 英語力*	卒業後の仕事*
D	名前 年齢 趣味	アルバイト*
E	名前 ニックネーム* 趣味	好きなダンス/エイサ*
F	名前 出身地 年齢	ヒップホップ*
J	名前 住所	オーストラリアホームステイ*
H	名前 趣味 家族* ペット*	自分が弾いているギター*
I	名前 年齢 住所 好きな食べ物*	アメリカのアーティスト*
J	名前	去年行ったライブ*
K	名前 住所 通学*	ダブルダッチの紹介*

一例として、同じ学生の英文を次に示す。
(筆者が学生の氏名をXXXと変更した)

プレテスト (ワード数: 17)

I am XXX. I'm 20 years old. I live in
Yokohama with my family. I like cake.

ポストテスト (ワード数: 37)

I like drawing a picture and making
something very much. I always draw for
class in my school. So, I am not sleep
while studying. I like Norman Rockwell
very much. He is famous artist in America.

(3) BBSの投稿メッセージ

学生は正確な英文を書くことよりも返事をもらった学生の英文を見て、海外の学生の興味を意識するようになった。内容は、最初は挨拶程度の英文が多かったが、後半は「ひめゆりの塔」を紹介し世界平和について語る、「ホワイトバンド」と貧困問題を語るなど社会問題や世界に目を向けるように変化した。また、質問やお願いなどが含まれるようになった。BBSの投稿、受け取った返事、同じ相手とのインタラクションの総数と一人あたりの平均を表7に示す。

表7 プレ・ポストテストの英文内容

	投稿数	返事の数	インタラクション回数
総 数	61	37	19
平 均	3	2	1
最 高	4	5	4

4. おわりに

本研究では「インターネット英語」の授業にBBSを導入し、海外の学生との協調学習が学生にもたらす効果について検討した。

今後の課題はより多くのデータの検討を重ね、Chat、ビデオレターなどの他のメディアによる交流との比較を行うことである。

本研究の分析で、BBSによる海外の学生との交流の効果として次のことがわかった。

- ① 学生は相手の関心を惹いたり、反応を意識したり、文化背景を考慮して異文化コミュニケーションができるようになった。
- ② 海外の学生と英語で実際に交流して、学生は自分の英語でも相手にメッセージは伝わると自信を持てるようになり、苦手意識を克服し、ライティング能力も向上した。
- ③ 学生は海外の学生と対話することの面白さや喜びを感じ、プロジェクト参加の学生満足度が高まった。

BBSによる協調学習は、英語以外の語学やコミュニケーション教育でも活用できる。BBSによる学生交流を授業に導入し、教員が学生に適切なアドバイスと励ましをすることで、教室、大学、国境、授業時間という枠組みを越え、学生同士が楽しく学び合うことが可能になると筆者は期待している。

謝辞

渡辺雅仁先生、参加者の皆様に感謝する。

参考文献

- [1] 立田ルミ, Neal Jost他: BBSとホームページを用いた日米意見交換. 情報科学研究 21, pp.63-72, 2003.
- [2] 平野絹枝: 言語能力の客観的指標の妥当性—日本人EFL大学生の場合. 上越教育大学研究紀要9 (2), pp.65-77, 1990.
- [3] Hughes, A: Testing for Language Teachers. Bell & Bain Ltd, pp.91-93, 1989.